The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「苦しみも未来もともに」 : モンゴルの反核運動リーダーとの対話 : 緊急勉強会 : 「モンゴルを襲う核のゴミ : モンゴル核廃棄物処分場問題は終わっていない 」から
Author(s)	吉本, るり子
Citation	モンゴル研究. 2013, 28, p. 74-78
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102389
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「苦しみも未来もともに」

モンゴルの反核運動リーダーとの対話

緊急勉強会：

「モンゴルを襲う核のゴミ　— モンゴル核廃棄物処分場問題は終わっていない —」から

2013年7月6日、大阪のサクラファミリアにおいて、モンゴルの核問題についての緊急勉強会:「モンゴルを襲う核のゴミ—モンゴル核廃棄物処分場問題は終わっていない —」を開催しました（主催：モンゴル核問題研究会・モンゴル研究会）。その中で、インターネットにより、モンゴルのゴロムト反核運動リーダーのアリオンボルドさんと会場とを双方向で結び、対話するといった試みが行われました。以下は、その内容を要約したものです。（以下敬称略）　（吉本るり子）

＊　＊　＊

アリオンボルド：

「みなさん、こんにちは。

日本の皆さん、モンゴルの核の問題に興味をもって集まっていただきありがとうございます。

私はゴロムト反核運動のリーダー、アリオンボルトと申します。私たちはモンゴルでウランを掘ること、モンゴルに原子力発電所を建設すること、モンゴルに核廃棄物を埋めることに対して、反対する運動を行ってきました。私たちの運動は、基本的にカンパをもとに行っています。外国に住んでいるモンゴル人が祖国にお金を送ったり、私たちの活動の趣旨に賛同してくれる外国人の人たちが支援してくださっています。特に日本ではリョウコが支援してくれていることはうれしいことです。

我々は、ゴロムトという新聞を発行し、地方に配ったり、3月11日の福島の原発事故の日やチェルノブイリの日にはデモを行ったり、広島の日には折り鶴アピールをしました。また、被害が起きた地域に行き、学習会を開き牧民たちを支援するなどの活動を行っています。

モンゴルの牧民は、情報を得られない状態にあるので、これは政府の人々にとってやりやすい状況にあると言っていいのです。世界的に見てもアフリカとか、こういったウラン採鉱の行われている地域の人々は情報から隔離されているというのが同じであり、モンゴルの牧民も何も知らないまま犠牲になる可能性があるのです。私たちは、そういったことにならないようにという思いで、活動を行っています。

（鉱毒事件の現場、ドルノゴビ県に行った時のことについて）

先頃、ゴロムトのメンバーと他の組織の代表者が協同して、ドルノゴビ県オランバドラフ・ソムに行き活動を行いました。牧民と合い、コジェゴビ社の事業についての情報を集め、コジェゴビの近くの土地の放射線量の計測などを行い、通常の９倍という高い線量を計測しました。シャルドブというところでは、何ら囲みも防御するものもないところに、廃棄物の泥を投棄しています。泥を防護用のビニール袋に入れて投棄していますが、そのビニールが破れていたりし、様々な土

壌汚染の可能性があります。それから、アルガラント・バク（オランバドラフ郡）では、牧民たちが集って、会議を開き話し合い、多くの苦しみを分かち合いました。

集めた情報、写真、音声、動画は、ゴロムトという私たちのブログに掲載しています。

会場から：

コジェゴビ社への封鎖は今も続いているのですか？

アリオンボルド：

昨日私は現地の人と電話で話しました。現在、牧民は座り込みは行っていません。アレバ社の試験採掘は開始されましたが、それはズーン・バヤン・バグ（サインシャンド市）という所で開始されたのです。そこでは２つの坑井が掘られていますが、一方、アルガラント・バグでは、何らまだ採掘活動は開始されていません。土地の人々の反対が強いので、今の所、採掘は始められていないのです。

会場から：

モンゴル政府とコジェゴビ社との関係はどうなっているのでしょうか？

アリオンボルド：

これに関して、オランバドラフ郡で開かれた会議の席上、コジェゴビ社の現地責任者は次のような失言をしています。

もしもウランの関係で人や家畜が健康被害を受けたり死んだりしたら誰が、その責任を取るのかという我々の質問に対し、「その責任をアレバ社は負わない。なぜかと言うと、我々は核エネルギー庁の命を受けて事業を行っているのだから、モンゴル政府が責任を負う」と。この言葉に、土地の牧民は強く反発しました。

これには関してまた、問題があります。核エネルギー庁は、アレバに許可を出し、つまりは協力しつつ、同時に自ら監査を行うといったシステムとなっていて、これは危険だと考えます。

政府は、アレバ社と事業による利益を51：49で分け合う契約です。だから単に外国企業の利益のためだけのことでなく、モンゴルの権力者、一部の者の利益となるものだということを、考え合わせる必要があります。

会場から：

銃を取って、会社を包囲するというのは、日本においてもモンゴルにおいてもただ事でないと思われますが、この件で逮捕者がでていないというのは、モンゴル国内で強い共感があるからなのでしょうか？他の理由があるのでしょうか？

アリオンボルド：

新聞上では、「銃を取って、守っている」というように報道されましたが、電話で現地の人と話すと、そうはなっていないと語りました。一部の若者は、実力での反対も辞さないとし、また、ウラン採掘のために来た人のゲルを倒し追い払う、といったことも起きましたが、全体としては合法的にことを行おうとしています。署名を集めて、大統領や国会議員、首相に提出するということをしています。今は、この集めた署名への返答を待っている状態です。

会場から：

モンゴルは1992年に一国非核地域宣言をし、国連でも認められました。その後2008年、小型

原発を持ちたいとか、あるいはウラン資源を売るといったような政策に、政府として急転換したように思われます。一国非核宣言との間で矛盾はないのですか？　政府の対応、それについての国民の意見はどうですか？

アリオンボルド：

現在のモンゴル政府は、イエローケーキを輸出する、原発建設は少し遅らせるといった政策を話しています。それをどこで決定したのかというと、国家安全保障委員会というところで政府が勝手に決めたのです。そこには国民は参加していません。私たちはそのことに、納得していません。国会議員の中でも、こういうことは、国家安全保障委員会や政府だけで決めることではない、国民全体の意見を入れるべきだ、とくに被害者になる可能性のある牧民が強く意見を言うべきだとする人がいます。

今、政府が強く望んでいるイエローケーキの輸出は、1グラムでもそれを輸出すると、それが利用され、また戻ってくるという可能性、いわゆる核燃料サイクルによって、必ずモンゴルへ戻ってくるということになります。現在のモンゴルの法律は、それがモンゴルに戻ってこないということを保証できない状況です。これは、危険なことです。もう一つ、モンゴルでの原発建設は、ここにおいても使用済み核燃料が出るのでそれをまた、処理する必要があります。そうすると原発建設とウラン輸出はどうしても、あってはならない話となります。

会場から：

掘り出されたウランはどういうルートで運ばれるのでしょうか？

アリオンボルト：

今のところ、我々にはこれに関して、情報を得る方法がありません。ウランに関する全てのことは、国家機密となっていて、困難です。

会場から：

現地（ドルノゴビ）に加工工場はあるのですか？

アリオンボルト：

イエローケーキは今のところ、モンゴルにあります。人々の話では、ドルノゴビで作っているイエローケーキの手前の段階のものはモンゴル国内にありますし、外には出していません。将来的に韓国等に出して、そこで燃料を作って、サウジアラビアで燃料として使われるといったことも、考えられていると思われますが、今のところ、これを証拠づけるものを我々はもっていません。鉱毒事件の起きたウランバトラフはウランを産出しますが、そこに廃棄物を埋設するといった可能性も、ゴビだからあると私たちは思っています。

会場から：

鉱毒被害を受けている牧民の方は、食べるものなど困っていないのでしょうか？

アリオンボルト：

とてもいい質問をありがとうございます。牧民は野菜は食べません、家畜や乳を食用にします。私たちが現地を訪れたとき、ノロブスレンさんの家を訪問したとき、山羊を屠殺しご馳走してくれました。屠殺された山羊は、肺に黒いものがあったり、白いものが他の臓器にあったりして、見た目にも異常だなとわかるものでしたが、私たちは昼間お腹をすかせやって来て、皆、それを

そのままいただきました。また乳を入れたお茶も飲みました。客である我々も心に不安を感じつつ、またもてなす側の人々も心に不安を抱えていました。元来、モンゴル人はこのようなことはなく、心から客をもてなし、もてなしを受けるのですが、今オランバドラフの人々は心からもてなすことができないのです。心に苦しい思いを抱いています。また、健康面でも被害を受けています。肝臓を患う地域が多いですし、20頭あまりの仔山羊が死にました。一部の家では、異常な仔ラクダ、仔山羊が多数生まれています。そのため、牧民は家畜の増産への意欲を失っています。若い優秀な牧民、若者たちがいるのですが、元気がありません。残念なことに、未だかつて起きなかったようなことが、今起きているのです。30年、40年と家畜の飼育に携わってきた人々は今までこんなことはなかった、コジェゴビ社が来てから、こういうことが起きていると話しています。

また、コジェゴビ社の人たちは、購入したペットボトル入りの水を飲んでいます。井戸の水、地下水は飲みません。牧民は地下水を飲んでいます。子供たちもその水を飲んでいます。幸いなことにモンゴル人は家畜を飼っています。すでに、家畜に被害が起きはじめているので、人への影響が予測されます。人々の健康を監視下に置かなければならないと考えています。人々は健康について心配しています。

最も危険なことは、コジェゴビ社のウランの採掘場が、牧民が汲む水の水源にあることです。

第二に、オランバドラフはまた、その風下に位置します。風による放射線の影響を心配しています。

会場から：

日本の水俣では、先に猫に被害が起きています。

アリオンボルト：

全く同じだと思います。

モンゴル政府が調査を行った時に9700万トグルクという多額の費用でもって行ったのですが、一人の牧民にも会うことなく調査を行い、その結果というのも、笑止千万なものでした。さらに、継続調査は外国にしてもらうとし、これは問題を他に放り投げたものです。こんな状況であり、本来は自分たちで解決できるはずのものを、他に託してしまったことを私たちは批判的に見ています。

会場から：

国民全体としては、ウラン鉱毒の問題をどう捉えているのでしょうか？

アリオンボルト：

基本的に一般の人々は情報を持っておらず、知らないといった状況です。ウランの鉱毒のことも具体的によく知らないし、一方、マスメディアからはウランは安全、危険でないといった情報が多く流されています。私たちゴロムトNGOは、特に情報提供ということを中心に活動しています。テレビ番組で話したり、ウラン災害関係のドキュメンタリーを翻訳して流したりしています。できる限り、情報提供をしていきたいと考えています。

会場から：

新聞大国と呼ばれるモンゴルで、全てのマスメディアがこの重大な情報を伝えていないのですか？　批判的な他のメディアもあるのでしょうか？

アリオンボルト：

すみません、あります。最近はウラン採掘に批判的な団体が多く出てきています。私たちの反核運動もその一つです。活動の活性化の結果、役割分担というものもできています。しかし概して主要メディアは政府側の立場をとっています。他の独立系の新聞、雑誌、テレビの中で我々の運動に関心を寄せ、調べているところがあります。しかし、これまでは、メディアが同一の立場をとった報道・宣伝が行われてきました。

主催者より：

TV9とか、彼らの運動をずっと追いかけ報道しているところもあります。

新聞記者たちもウランについて正しい情報、その危険性について正しい知識をもっていないといったこともあります。

会場から：

一緒に活動しようという、日本や世界の民主的な医療機関、関係者の方たちはいないのでしょうか？ウランや放射線について、その生体に与える影響を、癌になる前にそのリスクを減らすようなこともされたらどうでしょうか？　政府に対して、被害についてきっちりとしたデータをもち、標本も作って運動していく必要があるのでないかと思います。日本では60歳以上の退職された技師の方が大勢います。新聞やネットなどで呼びかけをされたらどうでしょうか？

アリオンボルト：

正におっしゃる通りです。我々には、そういった専門家、特に健康に関する、保健・医療関係の専門家が必要です。協力して活動できればと思います。考えていきたいと思います。実際、こうだから癌になったと特定することが難しいだけに、知識をもつ必要があります。医師の方々との連携について、考えています。また、国民自身がウランの人体への影響について知識を持つことが大切で、記者会見等する度に、また、ゴロムトとしても機会をつくって、自分たちの持っている基本的な知識を人々に提供しようとしています。私たちには専門家が必要です。協力できればいいと思います。

＊　＊　＊

最後に、勉強会のまとめにおいて、アリオンボルトさんは次のようなメッセージを会場の人々に送りました。

ウラン鉱毒事件の起きたモンゴル、また核の危険を蒙り、福島の事故の起きた日本、私たちはそういう共通の問題を抱え、これからも心をともにしてやっていくことができると思っています。一方私たちは、人類の未来を緑でいっぱいのすばらしいものに変えることもできるのです。苦しみもともにしましたが、輝かしい未来もともにして、これからも一緒にやっていきたいと思います。今日はモンゴルのことに関心をもっていただき、支援の気持ちを持って下さった皆さん、ありがとうございました。

（よしもと　るりこ）